台大日本語文研究第 19 期
2010 年 6 月，頁 27-50
2010-05-10 收稿，2010-08-20 通過刊登

從歷史小說的觀點來論井上靖的《蒼狼》的結構

黃翠娥*

摘要

井上靖在二次大戰末期閱讀了那珂通世博士的《成吉思汗實錄》(《元朝秘史》)，由於深受吸引，因此決定要書寫有關蒙古民族發展的歷史。《蒼狼》即是在這樣的動機下於昭和三十五（1960）年誕生的作品。井上靖說自己最想寫成吉思汗的部分是解開成吉思汗的無限的征服欲究竟如何產生的這份秘密。基於這樣的創作意圖，井上靖筆下的成吉思汗成爲爲了證明自己是蒙古祖先蒼狼的後代，因而不斷地戰鬥與侵略。然而井上靖所設計的這個「蒼狼原理」立即受到評論家大岡昇平的強烈批評。大岡昇平認爲「蒼狼原理」完全是作者先入爲主的觀念所致，爲了符合這個原理，作者不惜歪曲史實。當然井上靖當然也提出反駁，主要的理由是《元朝秘史》並不是一部史書，因此不會發生歪曲事實的事情發生……等。

本論文的主旨不在於評論誰的觀點正確，而是分析「蒼狼原理」的架構如何鋪成，當中的邏輯問題如何處理，《蒼狼》作爲一部歷史小說具有甚麼樣的特質……等問題。探討的順序爲首先比較《蒼狼》與原作《成吉思汗實錄》(《元朝秘史》)，從中尋找出《蒼狼》遵循史實的部分與虛構的部分，然後再探討遵循史實與虛構這兩個部份如何連結而成，最終嘗試分析井上靖在《蒼狼》這部作品中所欲呈現出來的具現代意義的主題。

關鍵詞：成吉思汗、蒼狼、歷史小說、元朝秘史

* 輔仁大學日本語文學系副教授

The Structure of Inoue Yasusi's Blue Wolf: A Historical Perspective

Huang, Tsui-o*

Abstract

At the end of WWII, Inoue Yasusi read *The Story of Genghis Khan* (*Genchou Hishi*, *The Secret History of the Mongols*) of Dr. Naka Michiyo and decided to write about the history of Mongol nation. *Blue Wolf* (Aoki Ookami)*: A Novel of the Life of Genghis Khan*, written in 1960, is therefore a work created by this motivation. According to Inoue, what interests him the most would be the cause of Genghis Khan's ceaseless ambition. Hence, he intends to unravel this mystery by writing. Based on this intention, the Genghis Khan created by Inoue becomes a man who, by constant fighting and invading, attempts to prove that he is a descendant of blue wolf (the ancestor of Mongols). Despite this, "the blue wolf principle" designed by Inoue had encountered strong criticism by Ooka Shohei. Ooka thinks that "the blue wolf principle" stems completely from the prejudice of Inoue. Furthermore, Ooka points out that Inoue even distort historical facts in order to fit his theory. Of course, Inoue made a retort immediately that *The Secret History of the Mongols* is not a historical document. Therefore, it is impossible for him to make misrepresentations.

The aim of this thesis is not to tell right from wrong, but to analyze how "the blue wolf principle" works and how it deals with the logical issues in the novel. Also, this essay seeks to probe into *Blue Wolf*'s

* Associate Professor of the Department of Japanese Literature, Fu Jen Catholic University

characteristics as a historical novel as well as its other issues. The order of my discussion will first be comparison between *Blue Wolf* and the source of writing, *The Story of Genghis Khan* (*The Secret History of the Mongols*). By comparing them, I will figure out the true and fictional parts of *Blue Wolf*. Then, I will investigate how Inoue connects fact and fiction in his novel. Finally, I attempt to analyze the modern theme that Inoue tries to convey by *Blue Wolf*.

Keywords: Genghis Khan, *Blue Wolf*, historical novel, *Genchou Hishi*

「蒼き狼」の構成について
—井上靖の歴史小説観—

黄翠娥*

要旨

井上靖は戦争の末期ごろ那珂通世博士の名著の『成吉思汗実録』（『元朝秘史』）を読んで、魅了されたため、蒙古民族を書く決心が付いたようである。その成果としての「蒼き狼」は昭和三十五年に出来たのである。ただ、井上靖によれば、成吉思汗について一番書きたいと思ったことは、成吉思汗のあの底知れぬ程大きい征服欲が一体どこから来たかという秘密だという。このような創作意図によって、モンゴルの祖先が蒼き狼となま白き牝鹿との間に生れたという民族伝承に従って、ジンギスカンが自らの中に流れるモンゴルの血を証しするために、何よりもまず〝蒼き狼〟にならねばならない。そして〝蒼き狼〟たらしめるためにひたすら敵を求め、侵略と略奪を続けて行くという筋になる。しかし、井上靖のこのような「狼の原理」という発明は大岡昇平に無残に批判された。大岡の批判の主旨は、「狼の原理」は歴史的事実の詳細な渉猟と検討の後に帰納的に把握されたものではなく、まったくの作者の先入観にすぎない。従って、この原理のために史実の都合のいい部分だけを拾い、都合の悪い部分は捨て去り、さらに必要に応じて原本の「元朝秘史」まで勝手に改竄してしまった。そのために作品は叙事詩的でもなく、歴史小説でもなく、スペクタクルめいた作りものになっているということである。無論、井上靖も反論を出した。

本発表の主旨は即ち、「蒼き狼」は歴史小説といえるかどうかの問

* 輔仁大学日本語文学科副教授

題を探究しようとすることである。探究の手順は以下の如くであるが、まず、「蒼き狼」と原本の『成吉思汗実録』(『元朝秘史』)との比較を通して、「蒼き狼」の中の創作手法及び改竄作業のロジックなどを分析する。最終的には「蒼き狼」における「虚構と史実」の繋がり、さらにこの作品の現代的意義を追究しようとする。

キーワード：ジンギスカン、蒼き狼、歴史小説、元朝秘史

「蒼き狼」の構成について
—井上靖の歴史小説観—

黄翠娥

一、始めに

「蒼き狼」[1]は成吉思汗の生涯を語る作品であり、昭和三十四年十月から『文芸春秋』に十回にわたり連載され、三十五年七月に完結、その年の十月に単行本として刊行された。成吉思汗はほとんどのヨーロッパ人にとって、他国に侵入し、その国を滅ぼし、また大量の人々を虐殺した悪魔のような人物であろう。が、中国の研究者は成吉思汗を中国人と見なし、蒙古の各部族を統一したこと、元朝の統一事業の基礎を作ったこと、さらに西征によって世界に注目されたことなどを彼の偉大な業績として大いに肯定している。掠奪があったにせよ、むしろ西征によって、中央アジア、またヨーロッパとの交流がさかんになり、中国の文明をこれらの地域に伝えることができたとして、彼の残忍性さえ擁護するのである[2]。

日本でも、同様に成吉思汗に好感を持っているせいか、彼に関する著作が夥しく、そのほとんどが成吉思汗の覇業の成立と経緯についての記述を重点にしている[3]。中には、単純に史伝的な手法を使って書いた作品ではなく、より文芸的な色彩を帯びている作もある。例えば、三島由紀夫の「エスガイの狩」がそれである。三島は、成吉思汗の父親のエスガイが母親をメルキト人から奪った経緯を語り、エスガイを英雄化している。また、司馬遼太郎の「戈壁の匈奴」を

---

1 テキストは『井上靖全集』第十二巻（新潮社、2007）所収のもの。

2 『成吉思汗研究文集』によれば、近代の研究者のほとんどが成吉思汗の遠征を肯定的に捉えている。さらに、しばしば批判される成吉思汗の残忍さをやむをえなかったことと擁護しているという。

3 福富八郎の『成吉思汗』（満鉄社会員、1936）、プラヴデディン著・濱中英田訳『成吉思汗』（富山房、1940）、尾崎士郎の『成吉思汗』（新潮社、昭和 15）、小林高四郎の『ジンギスカン』（岩波書店、1960）、ラーフ・フォックス著・由良君美訳『ジンギスカン』（筑摩書房、1967）、津本陽の『草原の覇王　チンギス・ハン』（PHP 研究所、2006）、堺屋太一の『堺屋太一が解くチンギス・ハンの世界』（講談社、2006）などの作がそれである。

あげることもできる。成吉思汗が絶えず西夏を征伐したのは、西夏の女性が美貌だという噂があって、そのような女性を手に入れるためだったという内容である。さらには、平成六年には野田秀樹が、ファッション・デザイナーが「制服」で世界を「征服」する戯曲「キル」を書き、また、平成十八年には『青き狼　地果て海尽きるまで』という映画が製作されている。そのような中でも、特に井上靖の「蒼き狼」は、人々に広く知られ、愛読されている作品ということができる。終生ほとんど休むことなく四隣の征服に明け暮れ、陣中に没した成吉思汗の一生を語るこの作は八章からなっている。作品のあらましは以下の通りである。

作品は鉄木真の出生に絡む、父親エスガイと母親ホエルンの時代から語られ始める。ホエルンはエスガイがメルキト人の手から奪い取った女性であった。一方、鉄木真は幼い頃からモンゴルの太祖は「蒼き狼」と「なま白き牝鹿」との間に生れたという民族伝承に感動し、自分がモンゴルの後裔であることを誇りに思っている。ところが、父親がメルキト人に毒殺されて、一家が同族に捨てられた後、鉄木真は自分の出生のことを聞かされる。それ以来、彼は自分が蒼き狼の後裔かメルキト人の子孫かということに悩み続ける。

鉄木真は家族を守るために悲惨な少年時代を送ったのち、妻を娶り、同盟関係を作って徐々に聚落の幕舎の数を増やしていった。だが、ある日、メルキト人に襲われ、妻のボルテを奪われてしまう。鉄木真は、数ヶ月の捜索と作戦によって、メルキト人を全滅し、ボルテを取り戻す。しかし、この時、ボルテはすでに妊娠していた。自分の出生に対する悩みと同じように、長子の出生が彼を思い悩ませる。

鉄木真はモンゴル高原の二大勢力のジャムカ、トオリル・カンと同盟関係を結んで宿敵のタタルを滅ぼし、さらにジャムカ、トオリル・カンを倒す。この時、彼は最愛の女性・忽蘭に出会う。その後、蒙古高原の部族を統一し、カンとなり、モンゴル国の建設や制度の整備などに力を入れる。しかし、彼はそのままではいられない。自

分が狼なら、モンゴル国の女性が美しい「なま白き牝鹿」になるために必要な綺麗な服装を手に入れるため、長城の向こうの国を攻めなければならない。この信念によって、まず、西夏、ウイグル族を投降させ、金をも攻める。そして、出生に疑問が残る長子を「蒼き狼」にするために、苦難に満ちた出征の任務を負わせる。

このように、成吉思汗は中央アジアの版図を狙って子孫などを大いに活動させた。だが、その一方で、忽蘭の死去と長子の病死を不憫に思い、心を痛める。結局、西暦一二二七年に成吉思汗は、西夏と金の国境で没する。遺言には、金への攻略の道と金に侵入する期間中は喪を秘めよという命令があった。

二、創作動機及び先行研究

「蒼き狼」を書くまでには、次のような経緯があった。即ち、井上靖は大学時代にベストセラーになった『成吉思汗は源義経也』に興味を引かれ、また戦争の末期の那珂通世著『成吉思汗実録』(『元朝秘史』) を読んで、その高い調子にすっかり魅了され、それ以来、蒙古民族というテーマが彼の中にあったのだという。何故成吉思汗に絞って書いたかについては、次のように述べている。

> 私は初め蒙古民族の興隆の相を書きたい気持ちに支配されていたが、それを成吉思汗という一人の人物にしぼってしまったのは、蒙古民族の興隆が全く成吉思汗という一人の英雄にその総てを負うていることが判ったからである。(中略) 私は成吉思汗を書くにしても、一代のうちに欧アにまたがる大国を建設した英雄の英雄物語を書く気はなかった。また古今未曾有の残虐な侵略者としての成吉思汗の遠征史を書く気もなかった。(中略) 私が成吉思汗について一番書きたいと思ったことは、成吉思汗のあの底知れぬ程大きい征服欲が一体どこから来たかという秘密である[4]。

即ち、成吉思汗の一生を書いた動機は、蒙古民族の興隆はすべて成

[4] 井上靖「『蒼き狼』の周囲」(『井上靖全集』第二十四巻、新潮社、1997) P.547。

吉思汗の力によるものであったこと、そして彼のあまりにも大きな征服欲がどこから来ているのか納得かいかなかったこと、この２点にあったというのである。井上靖は「歴史小説の主人公」[5]においても、同様の主張をして、歴史人物と作者の関係は、「一種の恋愛感情と呼んでいいようなもの」があると述べている。作品を著すということには、対象の分からないところを分かりたいという衝動があるものようである。大国の金へ侵入し、西夏に入り、カラキタイを平定し、回教国を劫掠し、アラル海・カスピ海、黒海まで部隊を派遣したという終わるところなき征服欲は、単なる蒙古高原の諸部族統一の延長ではない。井上靖は、そこに必ず何か根源的な秘密があると確信したのである。そして、その分からないところを解明するためには、歴史人物を傍観的に眺めるのではなく、人物の生命の内部にまで潜入し、その人物と一緒に考えたり行動したりしなければならなかった。それが「蒼き狼」における“狼の原理”の発見をもたらすのである。

「蒼き狼」が刊行されてまもなく、河盛好蔵は次のような読みを示した。即ちモンゴルの太祖が「蒼き狼」と「なま白き牝鹿」との間に生れたという民族伝承に従えば、彼は自らの中に流れるモンゴルの血を証するために、何よりもまず「蒼き狼」にならねばならなかった。「蒼き狼」は敵を持たねばならない。敵を持たぬ狼は狼でなくなる。そう信じて、成吉思汗は自らを「蒼き狼」たらしめるためにひたすら敵を求め、侵略と略奪を続けて行った、このように河盛は「青き狼」を読み解いたのである[6]。しかし、井上靖はこの“狼の原理”のために大岡昇平との間で論争をすることになる。大岡昇平は昭和三十六年一月の『群像』に「常識的文学論」と題する連載を始めたが、その第一回に「蒼き狼」を取り上げ、「『蒼き狼』は歴史小説か」という文章で、「蒼き狼」に対して疑問を投げかけた。即ち、井上の発明した“狼の原理”は歴史的事実の詳細な渉猟と検討

[5] 井上靖「歴史小説の主人公」（同注 4）PP.550-551。
[6] 河盛好蔵『週刊朝日』1960 年 11 月 13 日。

の後に帰納的に把握されたものではなく、いわば作者の先入観にすぎない。そして、この原理のために史実の都合のいい部分だけを拾い、都合の悪い部分は捨て去り、さらに必要に応じて原本の『元朝秘史』までも勝手に改竄している。そのために作品は叙事詩的でもなく、歴史小説でもなく、アメリカのスペクタクルめいた作りものになってしまっているという内容である[7]。これに対して、井上は『群像』二月号に「自作『蒼き狼』について」を書いて反論をした。「氏は『蒼き狼の原理の発明』と、私には余り有難くない言い方をしておられるが、その言い方を借用すれば、蒼き狼の原理を発明したことで、私は初めて成吉思汗を書きたいと思ったし、書くことができるという気持ちを持ったのであ」るとし、また、『元朝秘史』は史実ではなく、叙事詩なのだから、その描写をそのまま踏襲しなければならぬ謂われはない[8]としたのである。これに対して大岡昇平は、「『蒼き狼』は象徴か」[9]、「『蒼き狼』は叙事詩か」[10]という評論を出し、『蒼き狼』を批判し続けた。

本論文はこの論争の是非を論ずるつもりはない。歴史小説の名を冠し得る作品がどのようなものでなければならないかという規定はないからである。中国にも歴史小説について、様々な見方がある。司馬遷の歴史書『史記』を例にしよう。『史記』には、前の時代から伝わった史料、皇室が収蔵している史料、そして、実地調査を通して得た資料が用いられているが、特に実地調査で参考にした資料は様々であるため、司馬遷が選択する場合、どれを採用するかはまた彼の判断に委ねられることになる。したがって、『史記』でさえも、完全に信用できるとはいいがたいのである。中国の著名な学者の梁啓超も『中國歷史研究法』で自分の二十数年前に書いた『戊戌政變

---

7 大岡昇平「『蒼き狼』は歴史小説か」(「常識的文学論」『大岡昇平全集』15、筑摩書房、1996) PP.48-60。
8 井上靖「自作『蒼き狼』について—大岡氏の『常識的文学論』を読んで—」(同注 1) P.367
9 大岡昇平「『蒼き狼』は象徴か」(同注 7) PP.199-200。
10 大岡昇平「『蒼き狼』は叙事詩か」(同注 7) PP.201-204。

記』には虚構が存していると認めている[11]。日本では、森鷗外が「歴史そのまま」と「歴史離れ」をはっきりと区別し、昭和5、6年頃からは、次第に史実を尊重する傾向が生まれ、史伝小説・実録小説が流行した時期もあった。しかし、その後は、両系統が並存し、「歴史小説」というギャンルがどの程度、史実に忠実でなければならないかについては、まだ適切な主張が出ていない。ゆえに、ここでは長与善郎の歴史の関する芸術観を引用して、本論文の立場を明らかにしておきたい。

> 歴史は事実である処に価値があるが、藝術は事実よりも以上の物、以上の真実でなくてはならず、(中略)恐らく歴史の生命は其含むでゐる暗示にある。其暗示によつて単なる現実的事実の中から現象以上の真理や、美や、倫理的性質を掬み取り、それに藝術家自身の息を吐き込み、血と肉とを与へて、生々しい有機体となすものは藝術である。(中略)藝術では単に「斯くあつた」と云ふのみでは足りない。どうして「斯くなつたか」それが大事である。原因の意義の深さが大事である。事実では殆んど無根な原因からも重大な結果は生れるが、藝術に於ては如何なる事件にも作者が重大な根拠と責任とを感じてゐなくてはならない。その原因と結果との間の運命の必然な成り行き、其必然さの意義の深さ、特性、統一に藝術があるのである[12]。

芸術であるならば、事実から掬い上げられた真実を描き出さねばならないという主張である。大岡昇平の、歴史小説が作者の先入観によって歪められてはならないという主張ももっともではあるが、本論で問題にしたいのは「藝術家自身の息」であり、井上靖がどのような「血と肉を与へ」たかである。以下では、井上靖の創作手法を探究し、「蒼き狼」の「真理や、美や倫理的な性質」を汲み取ってみたい。

---

[11] 梁啓超『中國歷史研究法』(上海古籍出版、1987) P.97。
[12] 長与善郎「序(現実的戯曲について)」(『戯曲 項羽と劉邦』新潮社、1922) PP.2-3。

三、「蒼き狼」の創作手法の原理

「蒼き狼」にはまさしく「歴史そのまま」と「歴史離れ」の両系統が並存している。成吉思汗の生い立ち、覇業の成立などの経緯は、ほぼ『元朝秘史』にそのまま従ったものである。敵を次から次へと殲滅するシーンなどは、『元朝秘史』の資料を基に、それをより明瞭に記述したものといってよい。しかし、それと同時に彼の“狼の原理”を「歴史そのまま」の中に溶け込ませてもいるのである。まず、「歴史そのまま」の部分を見ていこう。

（一）歴史そのまま

成吉思汗の行動の理由については、多くの部分についてすでに資料がある。特に覇業についてであるが、同族のタイチュウトを滅ぼした理由は、父親のエスガイが亡くなって、タイチュウトをリーダーとする族人に捨てら、さらに後になってもタイチュウトに攻撃されたため、復讐すべき敵になったわけである。それから、自分と同盟関係を結んでいたジャムカ、トオリル・カンという二大勢力を敵にしたのも、攻められてからの反撃であったという。

タタル部族と金国を滅ぼさなければならなかった理由も十分ある。成吉思汗の先祖のアムバカイ汗は同じモンゴル高原の氏族のタタルの手で捕えられて金国の王のもとへ送られ、そこで、木の驢馬に釘付けにされ、生きながらにして皮を剥がされ、その体をこま切れにされてしまったという。そのアムバカイ汗が「汝ら、十本の手の指の爪が全部擦り切れ、更に十本の指全部を失うとも、必ず我がために仇を報ぜよ。」という遺言を残したため、成吉思汗はどうしてもこの二大集団を滅せねばならなかったのである。また、長城内の金国は、当時モンゴル高原の各部族を強く圧迫していた。高原の各部族の団結と興隆を恐れて離間の手を使い、部族の間の平和を壊したり、三年ごとに兵隊を出して一部の男を殺す「減丁」の政策を実行したりしていたのである。それゆえ、金への攻撃、及びモンゴルの各部族の統一は、部族を超えた願いであった。

西夏、ウイグルなどを投降させたのは、金国を攻めるために必要

だったからである。成吉思汗の目標は、西夏を滅ぼしてから、金国を攻め、最後に中国の宋を滅ぼすことにあった。西夏が金国に属している以上、投降させるか滅ぼすかしか成吉思汗には選択肢がない。それゆえ、西暦一二〇四から二七までの二十三年の間に西夏を六回も攻め、成吉思汗が自ら十万人の大軍を率いて攻めたりもしたのである。そしてホラズムを滅ぼしたことについても、それなりの理由がつけられている。最初はホラズムとの貿易を企図し、隊商を派遣したが、当地の守将によって捕縛・処刑され、携行していた商品もすべて掠奪されたため、戦いもやむなきに至ったのである。このように「蒼き狼」に描かれた成吉思汗の好戦性とその理由は、資料によって十分に裏付けられている。

しかし、井上靖の「『蒼き狼』において、私が書きたかったのは、歴史ではなく小説である。」[13]という発言から明らかなように、この作品は歴史の再現を目指したものではない。ゆえに「歴史離れ」の手法が作品の中心部分で使われることになる。

（二）歴史離れ

「蒼き狼」の「歴史離れ」の手法の根幹は、“狼の原理”にある。「蒼き狼」と『元朝秘史』との大きな違いは以下の通りである。

まず、成吉思汗の父親のエスガイが母親のホエルンを奪う事件についてであるが、『元朝秘史』では、エスガイは狩りの途中で、新婚の妻のホエルンを連れて自分の部落へ帰ろうとするメルキト人のチレドという若者に出会う。そしてその花嫁の美貌に魅了されたエスガイは兄と弟の協力を得て、チレドの手からホエルンを奪ったとされている（巻一）。これが『青い狼』になると、ホエルンはオルクヌウト部族の出で、メルキト部族の残忍な若者に掠奪され、連日殴打され、犯されたとなっている。そしてメルキトの聚落に拉致されて行く途中、オノン河畔に於て、エスガイの手に依って二重の掠奪を受け、ついにエスガイの妻となる。ホエルンにとっては、エスガイ

[13] 井上靖「自作『蒼き狼』について」（『井上靖全集』第二十四巻、新潮社、2007）P.560。

はむしろ助けてくれた恩人なのである。この事件は後にエスガイがメルキト人に毒殺されたことと繋がって、エスガイを悲劇の英雄に仕立てている。また、ホエルンがメルキト人に犯されたことにしたのは、成吉思汗の出生の疑惑を作るためであった。

次は、成吉思汗の幼時の鉄木真という名前の由来についてであるが、『元朝秘史』では、エスガイがタタル族を攻めて、鉄木真という戦士を捕まえる。それと大体同じ時間にホエルンが男児を生む。それで、鉄木真と名付けたということになっている（巻一）。何故、鉄木真という名前を付けたかについては従来様々な解釈があり、鉄木真がもつ鉄工の意味に注目し、成吉思汗が鉄工をしたことがあるためだという説もあれば、『元朝秘史』のような、蒙古の古来の習俗の一つで戦敗した敵の名前を使って、戦功を祝うためだという説もある。しかし、この名付けの秘密は「青き狼」では、“狼の原理”を展開させるのに巧みに利用されている。即ち、成吉思汗が生まれると、母親のホエルンは「嬰児が夫エスガイを充分納得させるように彼に似た眼鼻立ちを持っているかどうか」（424）と気にかける。そんな中、戦場にいる夫によって「鉄木真」という名前を付けられた。しかし、「鉄木真の名が首を刎ねた敵方の首領の名であると分かると、ホエルンとしてはそこに何か釈然としないものがあるのを感じないわけには行かなかった」。なぜなら、「エスガイが嬰児の出生を悦んでいるか、憎んでいるかは、依然としてホエルンには謎であった」（425）からである。「青き狼」では「鉄木真」という名前の由来の曖昧さを、“狼の原理”を全うしなければならない成吉思汗の運命に結び付けているのである。

また、成吉思汗が異腹の弟ベクテルを殺したことについてであるが、『元朝秘史』には、この異腹の弟がよく成吉思汗の獲物を奪ったため、成吉思汗によって殺されたとある。しかし、「蒼き狼」では、ベクテルが獲物を奪っただけではなく、成吉思汗がエスガイの子ではなく、メルキト人の子だと嘲笑したため、殺されたことになっている。「お前の躰にはメルキトの血が流れているのだ。お前はただホ

エルンの躰を借りて、この家に生れて来たのに過ぎないのだ。嘘だと思うなら母に訊いてみろ。(中略) 父エスガイはお前を少しも愛してはいなかった筈だ。そう言えば思いあたるだろう。」(443) というベクテルの攻撃に対して、鉄木真は「自分が太古の狼とも牝鹿とも無関係であることを考えると、必ず眼の前が真暗になるような絶望感に襲われた。(中略) いま自分の躰からモンゴルの血を取り上げられることは、過去の一切を否定することであると共に、未来の何事をも否定されることであった。(中略) 是が非でも自分はモンゴルの一員でなければならなかった。」(447) と思い悩む。そして、人間五十歳になったら、自ずと自分の親がはっきりしてくるらしい、メルキト人の血なら早老で手癖が悪くなり、ケレイト人なら頭が禿げてケチになるが、モンゴル族であれば、狼になる、という部族の男の話を聞いて、「五十になったら狼になりたいものだと思った。(中略) 己れがエスガイの子であり、モンゴルの血の継承者であることを自分自身のために立証しなければならなかった」(449) と、鉄木真はエスガイの子でなければならないという決意を固める。これらの記述は、即ち、異腹の弟を殺した事件を利用して、“狼の原理”に生きる意志を鉄木真に固めさせているのである。この、自分の出生の疑惑に対する悩みは、カンになってからも絶えなかった。例えば、兵士をやって弟のカサルを縛った事件では、母親のホエルンの激しい怒りを見て、「自分はホエルンがメルキト人の略奪者に依って拉致し去られた際にできた子供であった。それに違いなかった。母ホエルンは、自分を産ませたメルキトの略奪者を憎んだように、自分を憎んでいるのかも知れない。」(534) と自分の出生の秘密を、カサルを庇おうとする母親の目に見出している。

さらに、妻のボルテをメルキト人に奪われた件であるが、『元朝秘史』には、メルキト人のチレドがエスガイに妻を奪われたことへの復讐のため、成吉思汗の妻のボルテを奪って自分の弟にやり、数ヵ月後、鉄木真が妻を取り返したと記されている (巻三)。しかし、「蒼き狼」では、ボルテの妊娠が強調され、長子に「客人」という意味

の名前・ジュチが付けられたと語られている。

また、「蒼き狼」では、成吉思汗自身の出生の問題を取り上げると同時に、女性観がサブテーマとされ、“狼の原理”を支えている。『元朝秘史』では、母子が同族に捨てられた後、母親のホエルンがいかに勤勉で知恵があって、子供たちを育てることに優れていたかが記されている。成吉思汗も母親にたいへん孝行したという。ところが、「蒼き狼」ではそれだけではなく、母親の戦闘力も描かれている。父親に死なれて、族人に捨てられたとたんに、馬に乗って、勝手に牧地を移動しようとする族人の行動を阻止しようとするホエルンの姿を鉄木真は見る。

> 鉄木真は最後の集団が斜面の向うに姿を消してしまった時、急にがらんとして見えて来た広場の向う側からこちらに近寄って来るホエルンの姿を見た。(中略) ホエルンは極度に緊張しているために烈しい表情をしており、鉄木真には今までの如何なる場合の母親より、そんな母の姿が健気に美しく見えた。(441)

これは、“狼”の生みの親である母親の勇姿が描かれていると見るべきだろう。『元朝秘史』には、ホエルンのこのような姿はまったく記されていない。

一方、「蒼き狼」には女性に対する不信感、軽蔑感が随所に現れる。

> 鉄木真が八歳になった春、ホエルンはまた一人の子供を産んだ。こんどは女児でテムルンと名付けられた。鉄木真はこの時初めて、テムルンの体内にもまた狼と牝鹿の血が流れているのであろうかという疑問を内部に含んだある感慨に打たれた。(中略) 鉄木真は突き飛ばせばすぐに蹣跚き、殴りつければすぐ倒れて泣き出す女というものを、自分たち男と同一に考えるのは納得の行かないことであった。一緒にすることは厭だった。戦闘にも出て行けぬ弱者が、どうして天の命に依って西方の湖を渡って来た狼の血を承けついでいると言えるであろうか。(427)

それゆえ、鉄木真は女の子たちとは決して遊ばない。弱者への軽蔑というより、弱者でありながら同じモンゴル人の血を所有している

ことに対する反感が、八歳の少年の心に根を張っていたからである。即ち、“狼”の血統への拘りが戦うことのできない女性のことを軽蔑させたということができる。

また、『元朝秘史』で成吉思汗は、かつて奪われたことのある自分の妻の自尊心を一度も傷つけることがない。事件はすべて自分がうかつさに原因があると思ったからである。しかし、「蒼き狼」では、女性が拉致されること、奪われることに特に鉄木真の神経は過敏であり、そこに妻への不満が仄めいている。

> 鉄木真は合戦のあとで、多くの女たちが数珠繋ぎになって引き立て来るの
>
> を見ると、いつも一種名状し難い凶暴な気持ちに駆り立てられた。曾て、母ホエルンも、また妻ボルテもあのようにして引立てられたことがあったのだと思った。鉄木真はいつもそうした女たちの中から、気に入った女を選んで自分の帳幕に招いたが、ただ一人も自分の躰を守るために抵抗を試みる者はなかった。鉄木真の言うなりに自由になり、さして苦しそうな顔も悲しそうな顔もしなかった。
>
> 鉄木真は女というものが判らなかった。男たちは戦闘のために自分の生命を失うことさえも辞さないというのに、女たちは例外なく合戦に敗けたとなると敵方の男たちに従順であった。鉄木真は母ホエルンも妻ボルテをも引っくるめて、女というものを信じることはできなかった。幼時から持ち続けている女というものに対する認識を、鉄木真はいまも少しも変えていなかった。(515)

即ち、女性の反抗心のなさ、無貞操が、成吉思汗には我慢ならないのである。その原因を追究すれば、やはり“蒼き狼”の血統ゆえの誇りと深く関わってくるだろう。そして、成吉思汗は理想的な女性忽蘭に出会う。『元朝秘史』では、忽蘭は敗れたメルキト部族で、成吉思汗に献上された女性であるが、三日間、ある勢力に引き止められたため、貞操を成吉思汗に疑われ、検査によりその潔白を証明され

ている（巻八）。これに対して、「蒼き狼」においては、自分の貞操を守るためなら命を犠牲にしても構わぬという忽蘭の態度が成吉思汗をすっかり魅了する。さらに忽蘭は成吉思汗に「汝のいま私に対して持っているものは愛であるか」と詰問する。隷属ではなく愛を求める忽蘭のイメージは成吉思汗には鮮烈であった。それで、出征でも忽蘭を従卒の一員にしてずっとそばに置くのである。幼い頃の鉄木真には、「鹿は自分を美しく見せることによって狼に奉仕すると共に、瞬時たりとも警戒の心を解くことなくて、また夫に仕えている。風による木の葉のよそぎ一つにも、油断なくその方へ長い顔を向ける。（中略）防禦の態勢は完璧である。」（430）という牝鹿のイメージがあった。成吉思汗にとって忽蘭は“狼”にふさわしい“牝鹿”だったのである。

（三）両系統の融合

以上述べてきたように、成吉思汗の生い立ちと覇業の成立の経緯の根幹は、ほとんど『元朝秘史』に従っているが、“狼の原理”の構築及び“狼”としての成吉思汗の描写に関しては、フィクションが加えられている。そしてこのフィクションの部分は「歴史そのまま」と同じぐらいの比重を持ち、かつ、「歴史そのまま」の部分に無理なく組み込まれている。例を挙げて説明しよう。

成吉思汗は父のエスガイをメルキト人に毒死され、妻も奪われたこともある。それゆえメルキト部族を殲滅しなければならない。これは「歴史そのまま」の部分であるが、「メルキト部族を破った時、一人の男子も残さないように徹底的な殺戮を行った。（中略）他部族の者に対しては許せることも、この自分と同じ血を持っているかも知れぬ部族に対しては許せなかった。」（515－516）という意志表明は「歴史離れ」に属し、“狼の原理”を表した部分である。「蒼き狼」は全編にわたって、ほとんどこのような手法を使って筆が進められている。

金の国をどうしても滅ぼさなければならないことについても、『元朝秘史』に従えば、倒すべき宿敵だからである。しかし、「蒼き狼」

ではここでも“狼の原理”が働いている。即ち、成吉思汗の小さい頃からの南方の国々への憧れが理由として語られるのである。

> 巨大な城郭に囲まれた地域に人々は都市を形成して住んでおり、一生動かすことのない土や板で造った家屋を構えている。人々はそれぞれ専門の仕事を持ち、商人は店舗を造って商品を売り、百姓は土地を耕作して農作物を作り、役人は役所に通って諸事百般の仕事を司り、兵隊は武器を持って毎日戦闘の訓練に明け暮れている。そしてその城郭の中には大きな寺や役所が石で造られて天に聳え立っている。鉄木真は本当にそんな夢のような国があるのかと思った。もっともっと詳しく知りたかった。(433)

成吉思汗は遠征について、部下などに意見を求め、「もっと富裕な、もっと生まれて来た悦びを享受できる生活を望んでいる」(540)という声を聞く。牝鹿に華麗な服装を与えるように、“狼”はそのような声を満足させるべく戦うことを自らの使命としたのである。

(四)資料からの暗示

以上述べた「歴史離れ」の「歴史そのまま」への組み込みは、しかし、力づくの連結ではない。資料からの暗示、あるいは空白が井上靖の創造力を動かしているのである。

例えば、成吉思汗の出生の疑惑については、確かに『元朝秘史』では何も触れていない。しかし、母親のホエルンがもともとメルキト人のもとに行ったことは事実である。また、『元朝秘史』では、強奪された際のボルテの妊娠にも触れていないが、巻十三で、成吉思汗が四人の息子から後継者を選ぶ時、次男のチャプタイが「メルキト人に継がせるわけにはいかない」という理由で長男のジュチの継承に反対している。ボルテがメルキト人に妊娠させられたことを暗示しているのである。そしてここから、母親を妻と同じようにメルキト人に奪われた成吉思汗に出生の疑惑があっただろうと推測するのは、むしろ合理的だろう。敵の鉄木真という名前を付けたことが、エスガイの憎しみを示しているかもしれないという推測も無理では

ない。前述したように、鉄木真という名前の由来については未だに定説がないからである。

では、サブテーマの女性観についてはどうだろうか。“狼”である成吉思汗は、女性不信であり、女性の貞操に拘る。これは、戦闘に向かない女性は「蒼き狼」とはいえないし、ほかの部族に拉致されて、すぐ子を産むようでは、“狼”の血が汚されてしまうからである。忽蘭を理想的な女性と見なしたのも、彼女が成吉思汗一人にしか仕えない牝鹿のような女性であると同時に、敵と戦える戦闘力を持った女性だったからであった。これに対して『元朝秘史』では、戦争で負けたら、男性はほとんど殺され、女性は妻にされるか労働力に使われている。即ち、女性が奪われるのはごく普通なのである。そうであれば、貞操に拘ることは近代人の井上靖の勝手な拘りだったのだろうか。実は、『元朝秘史』でも、女性の羞恥心が記されているのである。巻三には成吉思汗の妻と一緒に拉致されたエスガイの妾についての描写がある。この女性は成吉思汗に殺された弟ベクテルの生みの親でもある人なのだが、彼女は成吉思汗一行の救援に来たにもかかわらず、わざと姿を消してしまう。カンになった子供たちに合わせる顔がないというのがその理由であった。このような記述がヒントになって、サブテーマとして女性の貞操観が浮上したのではないか。即ち、“狼の原理”を肉付けしている女性観は井上靖が勝手に持ち込んだ倫理観ではないのである。

以上の分析からいえることは、覇業を推し進める成吉思汗のエネルギー、つまり「蒼き狼」の後裔という使命感は、歴史把握の中から生まれてきた「真実」であるということである。そして“狼の原理”は、単なる史実ではない、歴史小説としての面白さ、ロマンを作品に与えている。それは、歴史小説に与えられた使命というべきものなのではなかろうか。

四、終わりに

以上述べてきたように、「蒼き狼」の創作の出発点は、まず謎を孕む人物を主人公に選ぶことにあった。そして、その謎を解明するため、一つの仮説を提示し、一方で、歴史的事件の曖昧なところ、定説のないところで想像力を働かせる。つまり、作家としての直観と暗示的な情報の分析の間で往還しながら、歴史から見出される「真理」と小説としての「美」を作り出していったのである。

井上靖の歴史小説の中では、「楼蘭」(昭和 34)、「風濤」(昭和 38)、「楊貴妃」(昭和 40)、「おろしや国酔夢譚」(昭和 43) などは史実に沿って筆を進める「歴史そのまま」の作品であり、「敦煌」(昭和 34) は「歴史離れ」の系統に属し、「天平の甍」(昭和 32) とこの「蒼き狼」(昭和 35) はそれらの中間になる作品と言える。また、「天平の甍」と「蒼き狼」を比べれば、「蒼き狼」の方が登場人物の性格がより鮮列であり、創造性がより高いといえるだろう。そして、「青き狼」は日本の他の歴史小説と比べても、特に「愛の問題」、「アイデンティティの問題」を取り扱って、一つのロマンスを完成させた点で、特徴のある作品ということができる。日本の歴史小説には、様々なスタイルがある。例えば、吉川英治の「新書太閤記」の豊臣のイメージは吉川本人と重なる。山岡荘八の「徳川家康」は弱小国の徳川のイメージを借りて、戦後の日本の状況を見据えながら、戦争と平和の問題をとらえている。海音寺潮五郎は人物の正当な評価を目標にして、「平将門」、「西郷隆盛」などを書いた。したがって、一口に歴史小説といっても、さまざまなモチーフから生まれているのである。その中で、「蒼き狼」は、主人公成吉思汗のエネルギーがどこから来ているのかという謎に焦点を当て、「歴史そのまま」と「歴史離れ」を緊密に結びつけたという意味で、異彩を放っているといえるのではなかろうか。

もう一つ付け加えておけば、上で指摘した「愛の問題」、「アイデンティティの問題」を生み出した「出生の疑惑」は、日本では古典文学から現代文学まで、さまざまな作品に用いられ、ドラマなどで

もおなじみのテーマである[14]。松本鶴雄はこの点を突いて、「『出生疑惑』『狼になる』『征服』という三題ばなしめいた設定は新しい解釈としては面白いが、それで成吉思汗の内面の秘密をからめとっていくとなると、稀代の英雄像も近代の青白き知識人めいてきて、何としても卑小感まぬかれないのである。このあたりの親しみやすい卑小化された英雄像が、外部の広大なユーラシア大陸の壮観とつり合わなくなってくるのであろう。」[15]と苦言を呈しているが、しかし、むしろそこに文化的融合のおもしろさを見るべきではないかと筆者などには思える。

テキスト

井上靖（2007）『井上靖全集』第十二巻 新潮社
『元朝秘史』（1968）廣文書局

参考文献

井上靖（1981）「自作『蒼き狼』について―大岡氏の『常識的文学論』を読んで―」（『井上靖歴史小説集』第四巻）岩波書店
井上靖（1997）「『蒼き狼』の周囲」（『井上靖全集』第二十四巻 新潮社
井上靖（1997）「歴史小説の主人公」（『井上靖全集』第二十四巻 新潮社
大岡昇平（1996）「『蒼き狼』は歴史小説か」（「常識的文学論」『大岡昇平全集』15）筑摩書房
河盛好蔵（1960）『週刊朝日』（11 月 13 日号）
小林高四郎（1960）『ジンギスカン』岩波書店
堺屋太一（2006）『堺屋太一が解くチンギス・ハンの世界』講談社

[14] 古典では『源氏物語』、『大鏡』、近現代文学では志賀直哉の『暗夜行路』、秋山香乃の『新撰組藤堂平助』、山崎豊子の『華麗なる一族』、さらにドラマでは「華の乱」、「愛譽のロメラ」、「赤い疑惑」など、枚挙に暇がない。聖徳太子、徳川家康などの人物の出生も話題されたりする。

[15] 松本鶴雄「『蒼き狼』とその問題性」（『国文学 解釈と鑑賞』第 52 巻 12 号、至文堂、1987）P.99。

成吉思汗研究所編『成吉思汗研究文集』（1991）内蒙古人民出版社
津本陽（2006）『草原の覇王 チンギス・ハン』PHP 研究所
長与善郎（1922）「序（現実的戯曲について）」（『戯曲 項羽と劉邦』新潮社
福富八郎（1936）『成吉思汗』満鐵社員会
プラヴデディン著・濱中英田訳（1940）『成吉思汗』富山房
松本鶴雄（1987）「『蒼き狼』とその問題性」（『解釈と鑑賞』第 52 巻 12 号）
ラーフ・フォックス著・由良君美訳（1967）『ジンギスカン』筑摩書房
梁啓超（1987）『中國歷史研究法』上海古籍出版社